HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学埋蔵文化財調査室ニュースレター　第2号
Issue Date	2007-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/53505
Type	bulletin
Note	特集 埋没河川
File Information	NL02.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第2号　2007年12月

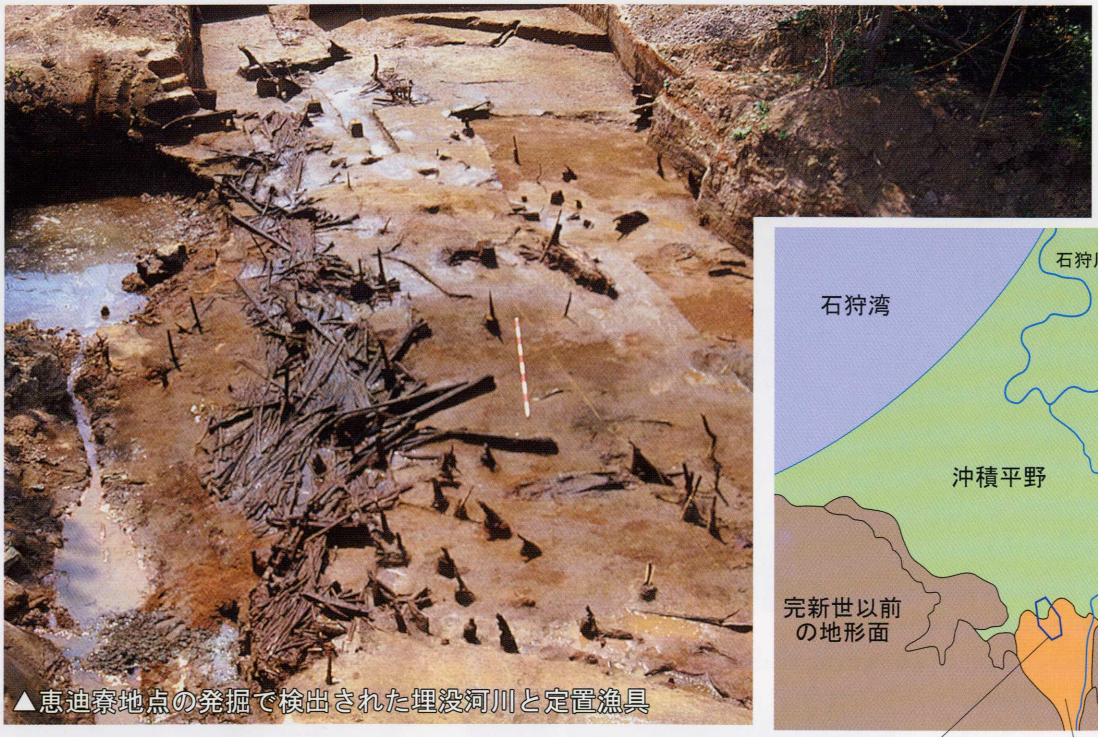
北海道大学 Hokkaido University Archaeological Research Center News Letter

埋蔵文化財調査室ニュースレター

特集　埋没河川

北大札幌キャンパスは、豊平川が形成した扇状地の末端から沖積平野へ移行する地点に立地しています。構内にはかつてサクシュコトニ川とその支流のセロンペツ川が流れていました。キャンパスの地下に眠る約 1000 年前の擦文文化と約 2000 年前の続縄文文化の遺跡、それらを遺した人たちの暮らしは、今では埋もれてしまったこれらの河川と密接にかかわっていたのです。現在、サクシュコトニ川は最新の土木技術によって再生されましたが、その川筋は今見えているところだけではなく、それに隣接して何本もの埋もれてしまった川筋が存在しています。さらにその周囲には湿地を流れる網状の小さな流れがいく条もありました。埋蔵文化財の調査の際には、そのような埋没してしまった川筋が発見され、川と向き合った当時の人たちの暮らしの様子を鮮明に知ることができる機会があります。

本号ではこれまでに埋蔵文化財調査室が明らかにしてきた札幌キャンパスの地下に眠る埋没河川の世界を紹介します。



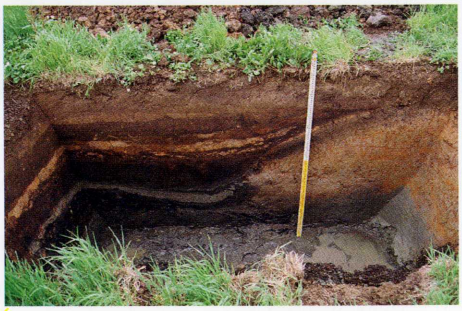
▲恵迪寮地点の発掘で検出された埋没河川と定置漁具

恵迪寮の建設に先立つ発掘調査ではセロンペツ川の埋没河川が検出されました。河川の中からは、多量の木杭や板材が発見されました。河川の流れをせき止めてサケを捕獲するための施設が設けられていたと考えられます。

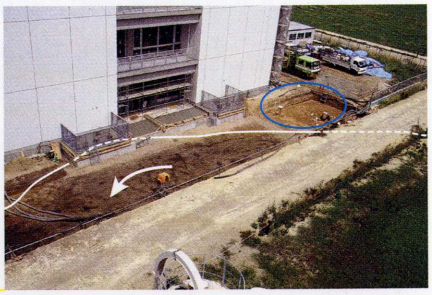
▲豊平川扇状地と下流低地の地形区分
（大丸裕武 1989『地理学評論』62-8 より）

■ 北海道大学構内から発見された埋没河川

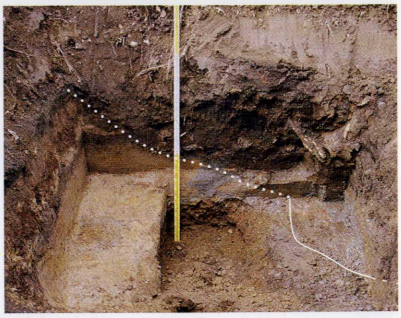
▲地震観測施設で検出された埋没河川
暗褐色の部分が埋没河川。埋没河川内からは擦文土器が出土しました。



▲次世代ポストゲノム研究棟で検出された埋没河川　河川の侵食によって削りこまれ、河川の谷が形成された状況がわかります。



▲創成科学研究棟南で検出された埋没河川
白線は埋没河川の範囲、青線は続縄文文化の活動場所のひろがりを示しています。この河川は続縄文期には河川として機能していましたが、次の擦文期になると埋積してしまったことが判明しています。



▲サクシュコトニ川再生事業に伴う調査で検出された埋没河川　サクシュコトニ川のかつての痕跡が調査によって発見されました。

○ 調査によって埋没河川が発見された箇所

● 調査によって埋没河川から遺物や遺構が検出された箇所

サクシュコトニ川とセロンペツ川

サクシュコトニ川の周囲で発見された埋没河川

新川

続縄文・擦文文化の大規模な遺跡

▲西門道路で検出されたセロンペツ川の埋没河川

▲人文・社会科学総合教育研究棟地点で検出された埋没河川

埋没河川とは？

「河川」は平行してのびる「自然堤防」とその間の「河原」、水流がある「流路」から構成されています。普段では流路は自然堤防に囲まれた河原の範囲内を移動していますが、洪水の時などに自然堤防を突き破って新しい流路に付け変わることがあります。そして元の流路だったところは流水が途絶えて湿地となり、やがて埋もれてゆきます。これが埋没河川です。また、人為的に河川が埋め立てられることもあります。

今回、再生されたサクシュコトニ川は、札幌団地の開発にともなって人の手によって埋められた川です。その周囲には、それ以前に形成された多くの埋没河川が存在しています。

◀第二農場北の馬術部馬場で検出された網状を呈する埋没河川　黒い範囲が埋没河川（札幌市埋蔵文化財センター『K435 遺跡第 2 次調査』2000 年）

▲薬学部研究棟地点で検出された埋没河川　白線内が埋没河川で、その左側に擦文文化の竪穴住居址（黄色の点線）があります。

▲大学構内の中央を東西に貫く環状道路建設の際に発見された埋没河川の調査状況　河川内からは木製の道具類が多量に出土しました（札幌市埋蔵文化財センター『K39 遺跡第 6 次調査』2001 年）。

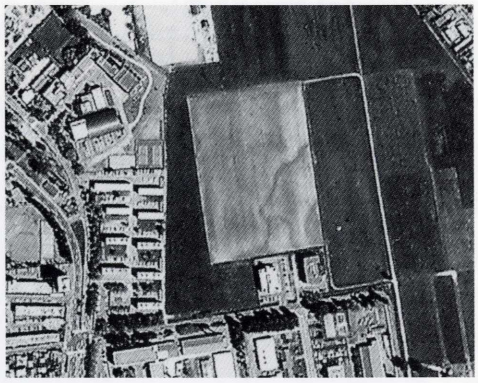
◀K39 遺跡第 6 次調査で発見された丸木舟の舳先の飾り板　かつて、この川にも舟運があったのだろう（出典は同上）

サクシュコトニ川とセロンペツ川

サクシュコトニ川はアイヌ語で「サ・クシ・コトニ」と言い、「浜の方を通るコトニ川」の意味といわれています（山田秀三 1965『札幌のアイヌ語地名を尋ねて』）。札幌キャンパスの南側にある清華亭付近で湧き出した地下水を水源としていました。第一農場を北流するセロンペツ川は、北大植物園付近を水源地とし、恵迪寮付近でサクシュコトニ川と合流します。「セロンペツ」の「セロン」はアイヌが蒸籠（セイロ）を訛って発音したことに由来する言葉で、それに川をあらわす「ペッ」がついたものです（前掲、山田）。両河川ともに、その流路が現在確認できる位置に定まったのは 2500 年ほど前の縄文文化の終わり頃であることも、構内の埋蔵文化財調査によってわかってきました。

第二農場に出現した「クロップマーク」

北海道大学の第二農場を上空から眺めると、大蛇が通ったような蛇行した影が見えます。これはcrop mark（クロップマーク）と呼ばれ、土壌の違いによって生じる作物の生長具合の差がそのような影として浮かび上がってきたものです。蛇行するクロップマークの地下には埋没河川があるはずです。



（講義風景）

埋蔵文化財調査室で行われたHUSTEP

北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）による国際交流科目の講義が、平成19年10月29日、埋蔵文化財調査室で行われました。今回、留学生を対象に講義されたテーマは、持続的な森林資源の有効活用を行っていたと考えられる北大構内の「先史森林文化」についてです。構内遺跡の出土木材を専門的に研究している北大北方生物圏フィールド科学センターの研究員と埋蔵文化財調査室員が講師となって、講義が進められました。留学生が実際の出土資料を手に取りながら説明を聞く場面も見られました。

お知らせ

第1回北海道大学埋蔵文化財調査室調査成果報告会を以下のように開催いたします。本年度の調査の概要と、人と自然の関係についての研究成果を紹介いたします。（参加費は無料ですが資料準備の都合上、できる限り平成20年1月7日までに電話・葉書・ファックスのいずれかで、奥付にある調査室の連絡先まで出席のご連絡を下さい。）

日時：　平成20年1月13日（日）
　　午後1時～3時30分
場所：　北海道大学学術交流会館　第3会議室

1:00　あいさつ・主旨説明
1:05　髙倉　純（北大埋蔵文化財調査室）
　　「北海道大学構内の自然と文化の歴史」
1:30　渡邊陽子（北大北方生物圏フィールド科学センター）
　　「北海道大学構内にみられる森林文化」
1:45　守屋豊人（北大埋蔵文化財調査室）
　　「薬学部研究棟地点の調査成果と擦文文化研究への新視点」
2:30　エクスカーション（学術交流会館から薬学部、弓道場、
　　人文・社会科学総合教育研究棟、埋蔵文化財調査室まで）

編集後記

北大キャンパスの地下には遺物や遺構といった人類が直接作り出した埋蔵文化財だけではなくて、埋没河川といったような自然環境も埋もれています。埋没河川は埋蔵文化財ではありませんが、当時の人々の生活を復元するためには欠くことのできないデータであり、貴重な文化資源です。当調査室ではこのような情報・データの整備も行っています。（小杉）

北海道大学埋蔵文化財調査室ニュースレター　第2号
発行：北海道大学埋蔵文化財調査室
〒060-0811　札幌市北区北11条西7丁目
電話：011-706-2671　ファックス：011-706-2094
e-mail：jun-ta@let.hokudai.ac.jp
URL：http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~r16749/maibun.html